

連載  
講座

## 津波から人々を救った男

歴史家・作家 加 来 耕 三

### 「稲むら」に放った火

津波は地震発生後、時間をあけて人々に襲いかかってくる。海面がにわかに高低をつくってうねり、一気に押し寄せてきた。そして津波は一瞬のうちに、すべてを飲み込んでしまう。

津波によって尊い人命が失われたことを、新聞

やテレビの報道で知るたびに、筆者はかつての国定教科書に掲載された、「稲むらの火」のことを、反射的に思い出さずにはいられない……。

あの話さえ知っていれば、もしかしたら助かったかもしれないのに……、と。

以下、その原文である（一部省略）。



挿絵 中村麻美

〈前略〉五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見下した。村では、豊年を祝ふよひ祭の支度<sup>みおろ</sup>に心を取られて、さつきの地震には一向気がつかないもののやうである。

村から海へ移した五兵衛の目は、忽ちそこに吸<sup>たちま</sup>附<sup>すい</sup>けられてしまった。風とは反対に波が沖へ沖へと動いて、見るみる海岸には、広い砂原や黒い岩底が現れて来た。

「大変だ。津波がやって来るに違ひない」〈中略〉

此のまゝにしておいたら、四百の命<sup>いのち</sup>（村人の数）が、村もろ共<sup>ひと</sup>一のみにやられてしまふ。もう一刻の猶予は出来ない。

「よし」と叫んで、家<sup>たいまつ</sup>にかけ込んだ五兵衛は、大きな松明を持って飛出して来た。そこには、取入れるばかりになつてゐるたくさんの稲束が積んである。

「もつたいないが、これで村中の命が救へるのだ」

と、五兵衛は、いきなり其の稲むらの一つに火を移した。風にあふられて、火の手がぱつと上つた。一つ又一个、五兵衛は夢中で走つた。かうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまふと、松明を捨てた。〈中略〉

稲むらの火は天をこがした。山寺では、此の火を見て早鐘<sup>はやがね</sup>をつき出した。〈中略〉

村中の人は、追々集つて来た。五兵衛は、後から後から上つて来る老幼男女を一人々々数へた。集つて来た人々は、もえてゐる稲むらと五兵衛の顔とを、代るがわる見くらべた。

其の時、五兵衛は力一ぱいの声で叫んだ。

「見ろ。やって来たぞ」

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見た。遠く海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。其の線は見るみる太くなつた。広くなつた。非常な速さで押寄せて来た。〈中略〉

人々は、自分等の村の上を荒狂つて通る白い恐しい海を見た。二度三度、村の上を海は進み又退

いた。

高台では、しばらく何の話し声もなかつた。一同は、波にぬぐり取られてあとかたもなくなつた村を、たゞあきれて見下してゐた。

稲むらの火は、風にあふられて又もえ上り、夕やみに包まれたあたりを明かるくした。始めて我にかへつた村人は、此の火によつて救はれたのだと気がつく<sup>と</sup>、無言のまゝ五兵衛の前にひざまづいてしまった。

この「稲むらの火」が国定教科書として掲載されたのは、昭和12年（1937）から戦後まもない昭和22年の3月までの間であつた。検定教科書の時代に移ると、徐々に姿を消し、1960年代にはいつしか見かけなくなつてしまった。

筆者はそのことが、今も残念でならない。

——この話は、実話を元にしたものであつた。

幕末の安政元年（1854）11月5日（新暦12月24日）に、実際に起きた安政南海地震において、御三家の一・紀州藩の領内、有田郡<sup>ありだ</sup>広村<sup>ひろむら</sup>（現・和歌山県有田郡<sup>ひろがわちやう</sup>広川町）での出来事を取材したものであつた。

この地震は、マグニチュード8・4と推定されている。しかも前日の11月4日（新暦12月23日）にも、安政東海地震が起きていた。マグニチュードは同断であつた。

作中の五兵衛は、正しくは濱口儀兵衛<sup>はまぐち ぎへえ</sup>といい、号して梧陵<sup>ごりやう</sup>。下総<sup>しもうさ</sup>（現・千葉県）の銚子<sup>しやうし</sup>で醤油製造業を営んでいた人物である。彼が扱った醤油は、今日も「ヤマサ醤油」として現存している。

当時、広村に在住していた儀兵衛は、この年、35歳であつた。

前日の安政東海地震は、地震の震源地から遠かったため、幸いにして広村にはさほどの被害を与えなかった。ところが、安政南海地震は、家屋に多大な損害を与え、“大砲のとどろくような音”とともに大津波の来襲となつた。

国定教科書の場面は、より正確を期せば、第1

波の津波が去って、のちのことであった。

古老たちから、津波の恐ろしさを聞いていた儀兵衛は、「津波は再び来る」と確信し、高台の八幡神社まで村人たちを避難誘導しようとしたが、すでに陽は暮れ、あたりは真っ暗になっていた。

方角を的確に示さねば、村人たちはそれこそ右往左往して、時を費やしてしまう。

儀兵衛は躊躇することなく、松明で道筋にあたる水田の稲むらに、次々と火をつけ、避難地を赤々と示し、逃げ道を確保した。

村人たちを救った燃える稲むらは、まもなく襲ってきた第2波の津波によってかき消されるほど、凄まじいものであった。

結局、津波は4度来襲し、村々の家屋や田畑に襲いかかったが、儀兵衛の機転は多くの村人たちの生命を救った。

## 「生き神様」の波乱な生涯

それから42年後の明治29年（1896）6月15日、後世にいう「明治三陸地震」——2万2千人の死者を出す大災害——が発生した。

この悲惨なニュースが全国に報じられる過程で、「濱口儀兵衛」の快挙＝「稲むらの火」が、改めて大阪毎日新聞に掲載されたのである。

これを読み、感動したのが、小泉八雲（ラフカディオ＝ハーン）であった。彼はこの美談をもとに、“A Living God”（生ける神）をアメリカの『大西洋評論』誌上に発表した。

蛇足ながら、この八雲の短編に感銘を受けた人物がいた。昭和に入って、和歌山県下の小学校で教員をしていた中井常蔵という青年であった。彼が国定教科書の教材公募に応募して、入選。それが冒頭の、「稲むらの火」となったのである。

もっとも、儀兵衛の活躍は、むしろ津波から村人を救った、そのあとにこそ発揮されていた。

彼は莫大な私財を投じて大堤防の築造に着手している。なぜ、そのようなことをしたのか。

津波の被害があまりにも大きく、村人が失意の中、離村していく姿を見て、それを防ごうとしたのである。家や田畑を失い、困窮する村人たちに、防波堤の工事に参加させることで収入を与え、生きていく希望を持たせようとしたのであった。

職を失った村人たちは、儀兵衛に手をあわせ、懸命に堤防造りに励んだ。4,500人の人々が、延べ5万6736名も従事し、4年近く歳月をかけて、ついに大堤防は完成した。

この防波堤がその威力を発揮したのは、大正2年（1913）、昭和東南海地震（昭和19年＝1944）において、またしても津波が押し寄せてきたときであった。旧石垣の堤防を楽々と越えた波浪も、儀兵衛たちの築いた大堤防を越えることはできなかった。

村人たちに生きる力を与えた儀兵衛は、一方で幕末の幕府、明治の新政府からも招聘される有為な人物でもあった。

文政3年（1820）に広村に生まれた儀兵衛は、2歳で父を失い、厳格な母の手で育てられた。12歳で浜口本家の養子となり、“七代目儀兵衛”を34歳のおりに襲名している。

浜口家の醤油造りに励む一方、彼は時代の方向を見据えて、蘭学修行もおこなった。

蘭学者・佐久間象山、幕臣・勝海舟とも交流があり、幕府老中の小笠原老岐守長行の知遇も得ていた。儀兵衛は老中を前に臆することなく、日本の開国を弁じたと伝えられている。

明治になって、和歌山藩勘定奉行、大参事をつとめ、中央にその名を知られた儀兵衛は、新政府の宰相ともいべき大久保利通の要請で駅通正、初代駅通頭（のちの郵政大臣）をつとめたりした。

明治17年、ようやく若き日の夢であった海外遊学に出発した儀兵衛は、腸ガンのために、ニューヨークのセント＝ビンセント病院で客死を遂げている。享年は66であった。

日本人にとって、忘れてはいけない恩人といえるのではあるまいか。